

「はじめてのキリスト教」説教要旨  
使う？ 使われる？

— お金について考える —

(ルカ二一・一三〜二一他)

還暦を過ぎてもシエイプした身体で、何もかもみんなあ 爆破したい (浜田省吾「MONKEY」とシヤウトし続ける「彼」。全くロックンローラーであり続けると言うのは大変だ。しかしこのダサカッコいい (!) 歌が三十年経ってなお歌われているのは、単なるノスタルジアではなく、普遍的なメッセージがあるからに違いない。勿論この曲の場合はカネとヒトである。カネは全てを変えるのか。カネは人を狂わすのか。確かにこの問いは今日も有効である。

実際人間社会にとって金銭、富の問題は新しいものではない。それは先に読んだ聖書箇所からも十分に支持される。遺産を巡る骨肉の争いは洋の東西を問わず二千年前からあった問題なのだ。それに対してイエスはどうか答えたのだろうか。今朝の「はじめてのキリスト教」では、ある意味誰もが逃れられない「カネとの付き合い」について、その「ウラ」と「オモテ」を見て行きたい。

## 一、カネに使われる「生き方」

このたとえにはよく『愚かな金持ち』のたとえ」という表題が付けられている。だから、問題は「カネ」そのものにあるのではなく、金持ちの愚かさにあることは明白だ。では彼の愚かさとはどこにあったのだろうか。イエスの教えはこの上なく明瞭、それは「貪欲」である。この金持ちは専ら自分の所有物の為に心悩ませ、それらを如何にしてひとり占めできるかと思案して、ついに蔵の建て替えと言うプランを思いつき、自分の心に「食え、飲め、楽しめ」とツイートした。そこにあるのは現世的な快樂と限り無き自我の肥大化であり、神を忘れた不敬虔な心であり、カネに縛られ、使われている窮屈な生き方である。こういう生き方をする人はいつの世にも存在する。その代表格が「地球上の半分の富を持つ男」と言われたハワード・ヒューズである。若くして莫大な遺産を受け継いだ彼は映画製作や飛行機ビジネスに没頭。キャサリン・ヘプバーンなど数々の女優と浮名を流した彼はビジネスの成功に反して孤独を深め、薬物依存に陥った。また潔癖症が昂じた彼はラスベガスの高級ホテルを買収し最上階を完全除菌し、裸で過ごしたと言う。最後にはドアノブはおろか蛇口に触れることも困難になりホームレスのような風体で徘徊、ヒッチハ

イクを繰り返したという。そして一九七六年二月、彼は死んだ。その遺書には四億ドルに迫る遺産総額の十六分の一がヒッチハイクで世話になった一人のブルーカラーに相続させる旨が書かれていた。当然分割協議は大紛糾。結局彼の残した膨大な資産は二〇一五年現在もなお塩漬け状態だと言う。何ともやるせない話である。

## 二、カネを正しく「使う」生き方

ではカネと正しく付き合っていくにはどうしたらよいのだろうか。どうしたら貪欲の罠から逃れることが出来るだろう。まずイエスは人のいのちは財産にあるのではないと言っている。これは重要なポイントである。お金はなるほど大切だ。しかしのちはプライスレスだ。よつていのちはカネとは比べられない。更に与えられた精妙な「いのち」の根源を考える時、人はそこにやはり神の存在を考えずにはおれなくなる。実際、一流の科学者たちが研究の対象である自然を観察していく中で、その精緻さに驚かされ、これらを造った存在、すなわち創造の神に辿りつくというケースは少なくないのだ。

いのちはカネに勝り、そのいのちは神によつて造られ、保たれている。そのように考える時、人は謙遜にならざるを得ない。そういう人はそう簡単にカネの魔力に屈

し、マモンの神にひざまずくことはない。むしろ自らの所有を神にささげ、カネを正しく用いて神の栄光をあらわすものになるのである、これこそが天に宝を積む良き人生なのである。

\* \* \*

時は明治の初め。ひとりの青年が丹波の山から京都に來た。放蕩三昧の末に身代を使い果たした彼は悪い事に悪病(梅毒)にかかり鼻を欠損。文字通り全てを失つて故郷に帰った。しかし彼はそこで養蚕に出会い、聖書に出会い、キリスト者になり、真実な幸福を得た。当時製糸業は「生死業」と揶揄されるほどで、全国各地で数々の女工哀史が展開されていたが、この鼻を欠いた異形のキリスト者の経営は一風変わつていた。「自らが喜びたいのなら、まず他を喜ばせる、相手に喜んでもらう心を持つこと」を理念に掲げ、読み書きのできない少年少女には文字と聖書を教え、工場よりも立派でクリスチャンの寮母を置いた女子寮を造った。そして会社が左前になつても、教育の働き縮小することはなかつたという。彼の名は波多野鶴吉。あの「グンゼ」の創業者である。一度はカネで躰いた彼もキリストに出会つて変えられ、よくカネを使い、神と人とに愛された。友よ、あなたはどうか。